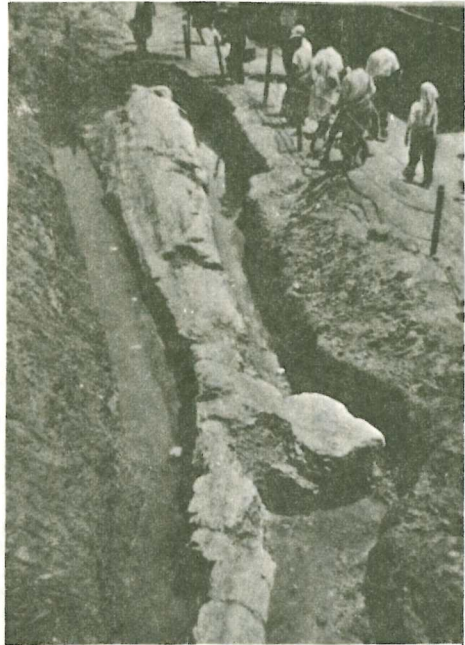


北九州の文化財を守る会 報

No.22 53. 3. 1

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区内1-1
北九州市教育委員会文化課内
電話 582-2389

印刷 博文堂印刷所
北九州市小倉北区长浜町2番22号
電話 511-1011



戸畑の珪化木について

戸畑区夜宮で珪化木が発見されたのは昭和十五年十月、当時この辺りは人家もまばらな畠地で、そこを区画整理中にその一部が露出したのであります。

戸畑中学校(現高校)の教頭だった山手文彦先生の調査で珪化木であることが確認され、当時直ちに天然記念物指定の申請がされ、文部省からも調査が行われました。

然しその頃はもう日華事変が拡大するばかりで、そのこともあってか、うやむやになったようです。山手先生は昭和二十二年学校を退職、旧戸畑市役所に入り、民生部長をされていましたが、数年前故人となられました。

戦後文化財の保護や発掘調査が盛んになるにつれ、この珪化木も調査されることになりました。上の写真は発掘作業当時時写したもので、右は発掘作業中、左は全貌を現わしたところです。人物と比べるとその大きさがわかります。直径約二メートル、長さは約四十メートル、二つに分かれた先端、向って左の方は崖下にもぐりこんでいるため全部発掘出来ず約三、四メートルはまだあるだろうとの推定です。タクスデュームという松柏類で、大きさは日本一を誇り、国指定天然記念物となりました。(※国指定天然記念物「夜宮の大珪化木」、昭和三十三年二月二十二日指定)

調査後、そこが道路であり、又風化を防ぐためにか、約二十メートルを残して埋められてしまいました。露出した部分は一段低いため、雨水がたまったり、草が生いしげり、割れ目をつくったり、又心ない人がそれをかいて持っていったりして可成の損傷を受けました。後、周囲に金網の囲いをついたり天井を覆ったりして、やっと傷を防ぐようになりまし

た。なお、付近を流れる天籟寺川の河床から珪化木の破片を拾い集めたという人もいますので、未だ付近に埋まっている可能性もあると思います。(戸畑区 福田 安敏)

奇しき因縁と思えてなりません。移転後資料の整理が出来ていませんので思い出すままのことを拾い上げます。

(一)、八幡鳴水の旧家古海氏は故里松井田庄の出である。(八幡町史第十一章) 国東の山上の寺の広場に全面文字で埋められた巨大の石碑がある。火災類焼で資料はなくなったが末尾に上野国緑野郡云々とあった記憶がある。当時遠い上州からかかる山奥にかかる巨大の石碑をよくぞ建てたものと疑問を持ったが緑野郡(今は多野郡)と松井田とはほど遠からぬ所なのでありなんでしょう。

(二)、三奈木の養蚕製糸にふるさと

の技術が入っている(安陪光正氏編纂三奈木村史料六安陪庄作伝)ふるさと前橋市富岡市より直接に

伝わったものと熊本を経て伝わった技術とある。又西郷に呼応して立つた中津隊増田宗太郎の死後その妻増田鹿子に依り中津方面に伝わったものもある。

昭和五十一年十二月十八日毎日新聞の一節——十数名の乙女を率て遙々と筑紫を出て鶏が鳴く東国上野の富岡模範製糸工場に赴き給ひぬ云云。

(三)、求菩提の修験僧がふるさとの寺を訪れる(求菩提資料館展示資料の内鉄心坊全国修業行程図)

四、百合若大臣の悪家臣別府貞澄貞貴兄弟の遺跡ありとの記載(筑前国続風土記巻二十三志摩郡)

(五)、緒方惟栄が配流されている(国史研究要覧百四十六頁) 緒方惟栄義経に属せしため頼朝により上野国利根郡に配流波多野四郎能成の

劉 寒吉氏 西日本文化賞を受賞

本会の顧問であります劉寒吉さんが、第三十六回(昭和五十二年)西日本文化賞を受賞しました。西日本文化賞は、西日本新聞社が西日本地区の文化の発展に資するために昭和十五年に設けたもので、今までに一八一件、一七八人、十三団体が表彰されています。

劉さんは、社会文化部門の領域で、「西日本における文学活動と地域文化の推進に尽くした功績」が顕著であったとして受賞されました。

なお、受賞式は昨年の十一月三日(文化の日)に福岡市の福岡国際ホテルで行われました。

許に幽され其の子孫沼田氏を氏とすとの伝へあり。

(六)、咸宜園広瀬淡窓の門人中に上野国住人二名あり。

(七)、遠賀郡芦屋の小田宅子の東路日誌に記された前橋市(西日本文化百三十八号中原三十四氏馬と地名)刀根川の大渡とて大いなる早瀬なりその方に関所ありて切手といふ物を出すこの川を渡りて三里ばかり行けば前橋という所あり。

市の中央を流れる上流に大渡りがあり今は橋が架せられてが少年時代は水泳に楽しんだ所だ。

文中の大渡はこれより上流と思われ赤城榛名妙義の三山が殊に美しく眺められる。

今後、吾がふるさとと心のふるさと、九州とのつながりを私は私なりに調べることを余生の楽しみの一つにするつもりです。

もし、御手持ちの資料なぞございましたら是非御教示を御願いたします。

(筆者は元八幡東区理事。先ごろ群馬県前橋市若宮町二丁目十二―八に転居)

お知らせ

五十三年度総会を四月八日(土)午後二時三十分より視聴覚センターで開催の予定です。多数のご出席をお願いします。

催物案内

—重要無形文化財文楽の公演—

き	3月25日(土)	戸畑市民会館大ホール
と	昼午後1時30分	
と	夜午後5時30分の2回	
こ		
開		
入	A 席 1,200円(1,400円)	
場	B 席 600円(800円)	
料	カ 席 当日券	
	コ 文化課、各区市民会館及び市	
前	内主要プレイガイドで発売	
売	昼 花競四季寿、平家女護島	
券	壇浦兜軍記	
	夜 恋女房染分手綱、近頃河	
上	原の達引、音牙春日月	
狂		
演		
言		
主	催 北九州市教育委員会	

第24回 文化財防火デー

例年一月二十六日を、「文化財防火デー」として、この日を中心

に文化財を火災や震災その他の災害から守るため、全国的に文化財防火運動が展開されています。

本市においても広報活動や特別査察、消防演習などが実施されましたが、本会でも今年度事業の一つとして消防演習に参加しました。今年度は日程の決定が遅くなったため、会員の方々には通知ができませんでした。来年は会報で案内し、会員の方々もできるようなしりたいと考えています。

◇早いもので、一巡して又戸畑に編集当番が廻って来ましたが、今度も力作の原稿をいただきましたが、頁数から大部はみだすようになりました。止むを得ず文意を損わないうよう、かなり省略しました。何卒悪しからず御了承下さい。

◇なお、昨年十二月三日の役員会でこの頃の会報が研究誌のように少し固苦しくなっているのでは、もっとくだけた記事にしてほしいとの意見が強くありました。その声を動案されて原稿を書いて頂くようお願いいたします。(福田)

編集後記

◇事務局長より◇

◇会報二十二号ができました。今回は戸畑支部の担当です。

◇五十二年度会費の納入をお忘れの会員は、同封の払込書用紙をご利用の上、至急納入ください。

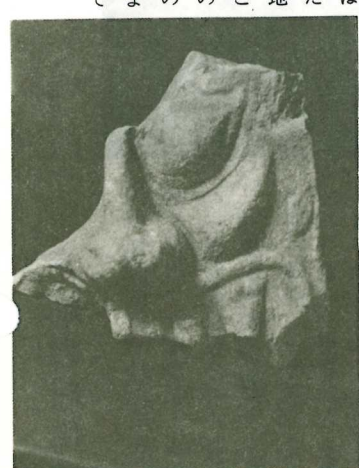
古代瓦収集の記

戸畑区 伊崎 吉兵衛

昭和四十九年十一月九日、戸畑郷土研究会の主催で八幡の史跡めぐりを催した。今は亡き佐藤大雄会長をはじめ、男十名、女三名の一行で、説明役はこの地にお詳しい竹中岩夫氏にお願いした。秋晴の好天候に恵まれ、マイクロボスにゆつくり腰かけて戸畑図書館前を午前十時半に出発した。往路は、まず鳥野の春日神社旧地で下車した。丘を上りつめた眺望のよい所である。麻生氏の氏神の由で、建久五年宇都宮から麻生重業が遠賀、鞍手両郡三千町歩を賜り転封された時、旧領から勤請したものであろう。戸畑の八幡宮が天正年間に枝光村宮田村山から戸畑村の塩井崎に招請し戸畑、中原両村の土産神にしたとあるから、この春日神社も枝光、八幡と同時に祀られたものと思う。

この付近の史跡に花尾城や上の名などがあるが、私の五才の時亡くなった母の里が上の名なので昔を思い出して何となく懐しさを覚えた。次の降車地が北浦の廃寺跡である。やや小高い所にある百坪か百五十坪程の大根畑がそれで数で隔てられた一段下った所も寺領だそうである。この二つを合わせ

ても大して広い境内ではない。それでいて国分寺級の格式高い古寺と云い伝えられているのはなぜだろうか。ここからは鬼瓦や布目瓦が度々出土しているという。竹中さんの説明を聞きながら島の端に沿ってぶらぶら歩いていると、ふと島隅にかなり大きな古瓦らしいものを見つけた。拾いあげて見るに縦横とも二三、四センチ程の瓦で厚みもあり、ずっしりと持ち重りがする。よく見ると頑丈な鼻をもった鬼瓦の半面で、今掘り出したばかりだといったように水気を含んでいる。目敏く見た竹中さんは驚き顔でこれは大したものだ。千百年から千三百年位前の平安時代に百済から舶載された物であろうとのことである。それにしても吾々は今まで幾度となく訪れたのにこんな大きな物を一度も拾ったことがないと思ってしまう。そのう聞くと俄かに大事な物に思われ小靴にしまいこんで、こわれない様に横抱きにした。いずれこの島の持ち主であるお百姓が土中から掘り出したのだろうか、悲しいかな猫に小判で無雑作にうち捨てたものであろう。布目瓦の破片はあつたりに散在しており、家内が三つ



北浦廃寺の鬼瓦

直方に着いたのは目をなぞるかに過ぎていた。遠賀川に架した長橋を渡り、橋畔の中島家に立寄った。中島氏は直方の旧家で、玄関に入るとすでに出土品の大瓶がでんとすわっている。遠賀川敷からのものが多いらしく、縄文、弥生の先史遺物が表の間から奥の部屋へと所狭ましと置かれている。さながら小博物館の態で、ここでは人間の方が小さくなって住まわされて貰っているといいたい位である。高杯、提瓶、古瓦から小さな物は石斧、石鏃、石庖丁、石錘など様々である。大きな瓶類は流石に無駄なものも少なく、丁寧に割れ目を継ぎ合わせ、駄部は石膏で補修してある。この手間と根気だけでも大変なことだろうと頭が下がる思いである。われわれの遠祖の生活垣間見る多種多量な出土品に圧倒されて中島家を辞した。なお私が北浦の廃寺跡で鬼瓦を拾ったことを知ったご当主は、実物を一見され、これは国宝級のものだと言った。

下冷えのするわが家の秋のともしびのもとで鬼瓦に対してはと泌々とした気分になる。ずっしりと掌にこたえる千年の重み、彫りの深い不敵な面魂、見れば見る程味のある鬼面である。広さは縦二十三センチ、横二十三・五センチで重さは二・三キロである。完全に原形のあるのは左の直線部だけであるが、幸運にも偉大な鼻と左頬が無残なため、左右の寸法は推

し測られる。横の寸法は二十九センチ、上部の眉と頭髪は若干あつたと考えられるし、下部も頤まであつたと推察すれば縦の寸法は三十五センチ近くはあつたであろう。地の厚さはところによって多少異なるが三・四〜三・八センチである。最も高いのが鼻で四・八センチ、眼球及び頬肉の高さはいずれも二センチ。又各部の大きさを記せば次の通りである。口の横巾二十四センチ(推測)、鼻翼巾八・六センチ、鼻長十二センチ、眼長九・四センチ、眼広六・五センチ、頬肉縦五・二センチ、横九センチ、歯は四本残っていて左端の鬼齒(犬歯)は惜しくも先が折れている。口は繭形をしていると思われ、頬肉から少し離れたところに見える尻上りの列ね点は頬髭ではないだろう。鼻と口との間の「人中」といわれる溝がほとんど見えない位両者がくっついているのも面白い。顔の道具が各々その存在を主張し、誇張しながらしかもバランスをとっているところ、上代の工人の手腕は大したものだと感心する。

漁師集落のことである。東西両方が小高く続いて沢に似た地形が北に向ってなだれている。低地は今でこそ一面の田圃であるが、昔は洞海の湾奥から南に向って入り込んでいたに違いない。滄桑の変というほど大袈裟な地殻変動はなかったにしても当時より地盤が隆起して来たことは確かである。千数百年以前は魚介の宝庫と云われた洞海の水に臨んだ半農半漁の数軒あるいはそれ以上の集落であつたに違いない。それなればこそ今に云い伝えられる寺院も建立されたのであろう。それが何らかの原因(地勢の変化?)で人煙が稀薄になり、経済的な基盤を失つたものであろう。かくして寺院の維持が出来なくなり無住となつたと思う普通の民家でもそうであるが人の居なくなつてからの荒廃の足どりは早く、幾百年の年月はただ瓦礫と伝承のみ残すことになり果てたのであろう。もう一度機会を得てこの寺跡に佇み、ひとり往古を心ゆくまで偲んでみたい。

「貴船」はその敷地売却金で天神(菅原神社)改築を行なった関係上須佐大神と共に同社に合祀されている。「弥勒塚」は薬師(天籟寺)境内に、「水神」はどうなつたか不明だが多分農業用水の必要がなくなったので海にでも出られたのであろう。とも角四ヶ所を除いては殆んどが区画整理の犠牲となつた。然しこの四ヶ所と雖も昔の面影のまゝにあるというのではなく或は近くに道路が新設され又高い鉄筋建築が建つなどして「昔」を感じさせるものが少なくなつていく。その中で「火除地蔵」だけは全く昔のままである。と言うのは天籟寺(枝村)が区画整理に入つたのは昭和十二年だが、この地蔵さまを中心とする住居地帯は全く手が入れられず、為に完全に残ることが出来た。今となつては貴重な環境である。

火除地蔵さまごま

戸畑区 安田 富美子

向え天神、豊前坊 川に水神 畑、観音 夜宮山の神 上の山弥勒 竹下貴船 内薬師 火除地蔵 六地藏 鼻に庚申 夷舞い込む

これは、明治三十四年八十八才で亡くなった渡辺利三さんが、当時村人の信仰の対象となつていた天籟寺の敷地さまから辻仏さままでを調子よく纏めこんだものである。利三さんは百姓組頭制度の最後の組頭を勤めた大岡嘉三郎さんの次男で渡辺家の養子にいらした人。黒田公が戸畑に来られ、上の山(今の小芝町)で迎えた時一人土下座してパチパチと手を叩いて拝んだという話が残っている。

この文句は、利三さんが次男金蔵さんの嫁キセに、「あねえ、こりやどげえか」と示したと当のキセが私の母に話したそうで、民俗調査の最中母が辿り、記憶の糸を引き出して聞かせて呉れた。キセは私には大伯母に当り文句であつたが物覚えは良かった。昭和十五年、八十八才で亡くなった。文句の内容は「向え方には天神さまと豊前坊さま、天籟寺川横には水神さま、畑には観音さま、夜

宮の山には山の神さま、上の山には弥勒さま、竹の下には貴船さま村中にはお薬師さま、火除地蔵さま、六地藏さま、又、竜が鼻には庚申さま、そして夷さまは福を天籟寺に呼び込んで下さる。」と云うことであらう。

ここに謳われた神仏は十二ヶ所で昭和の初め頃までその執れもがまつりやお籠りをして豊作祈願や息災祈願をしていた。天籟寺は大正の初め頃迄は「天籟寺五十五軒」と言われた程の小集落で、昭和の初めには人口もふえたが、まだまだ農業を本業としていたから之等の行事は大切に行われていた。然し昭和四年の沢見区画整理に、「上の山弥勒」を移転したのを手始めに沖台、夜宮、第一大谷、第二大谷、椎ノ木谷と次々の区画整理のおかげで天籟寺は全く変貌すると同時にこの文句の中の神仏も元地を離れてしまった。現在昔のまま位置も環境も変えず残っているのは「天神」「観音」「薬師」「火除地蔵」の四ヶ所。「六地藏」「庚申」は道路沿いに動かされ今は繁華街の騒音と汚れた空気の中に晒されている。又「豊前坊」「山の神」「夷さま」は天神の境内に、

「貴船」はその敷地売却金で天神(菅原神社)改築を行なった関係上須佐大神と共に同社に合祀されている。「弥勒塚」は薬師(天籟寺)境内に、「水神」はどうなつたか不明だが多分農業用水の必要がなくなったので海にでも出られたのであろう。とも角四ヶ所を除いては殆んどが区画整理の犠牲となつた。然しこの四ヶ所と雖も昔の面影のまゝにあるというのではなく或は近くに道路が新設され又高い鉄筋建築が建つなどして「昔」を感じさせるものが少なくなつていく。その中で「火除地蔵」だけは全く昔のままである。と言うのは天籟寺(枝村)が区画整理に入つたのは昭和十二年だが、この地蔵さまを中心とする住居地帯は全く手が入れられず、為に完全に残ることが出来た。今となつては貴重な環境である。

淋しく不気味なところになった。ただ地蔵盆の夜だけは暗い夜道を時ならぬ賑わいが通った。

それにしてはこの火除地蔵の御利益が天籟寺の過去の火事を救えてみると詢に少ない。

大正十年春、安田藤太郎土蔵全焼するも類焼なし。

昭和三十年一月六日、安田一馬住宅全焼するも東隣家の台所軒下を焦がしたのみ。

昭和三十三年三月三十日、天籟寺市場全焼。死者五名を出す放火事件であったが隣接家屋被害なし。

昭和に入つては市の消防機能の充実に向う処は多いが兎に角火事の発生が少なくない。大正時代までは中原、戸畑方面に火事があれば中組、下方組が区長も交えて火難除けのお籠りをしていたということである。

御本尊は高さ三十種、凝灰岩で出来た坐像だが現在は何に何体もお像が坐っている。昔はこの本尊一体であったそうで林勇之助さん(明治十四年生、健在)の子供時分には、この地蔵の頭を踏んで天井に上つて暴れ廻っていたそうだが「地蔵と子供」で何の不都合も起らなかった。その中いつの間にか首が落ちたが子供たちは掃りぎわに必らず胴の上に据えた。その首が紛失しているのを勿体なく思った土着人の夜宮のおナミさんが

石工に頼んで作りつけをしたというのが今の首で昭和十年頃の事だそうである。

火除地蔵のまつりは盆月二十四日の夜で薬師堂の住職の読経に続いて盆踊り供養が行われた。境内が狭いので大低は北隣りの家の門

先で行ったがこの夜は踊り子にとつては踊り納め世話役の若い衆にとつては祇園からの一連の世話のし納めとあつて集落総動員で夜を徹して賑わつた。明治の終り頃までは若い衆がそれ〴〵麦藁細工で思い付きの物を作り之を境内の木

の枝などに展示して優劣を競つたというが、その中で片口じょうけを胴にして両脇に編笠をあしらつて蟬に仕立て大松にとまらせた演出は村人の評判であつたということである。

この大松について安田フルノさん(明治二十四年生)が面白い話を聞かせて呉れた。ずい分大きなもので周囲が二抱え程もあつたが既に枝もない枯木となつていた。明治三十五年頃にはこの木に寄せて火の見る梯子をかけていたのも火除地蔵ということからだろう。この松の根がそれこそ蛇龍の如く

地を這つて用心しないと足を取られた。天籟寺の者は春秋二回の収穫期になるとこの根を掘つて名護屋の浜に夜ダコをとりに行つた。潮のひいた岩かげや砂の中に戈を突きさすと手ごたえがあつて面白

いようにタコがとれた。この夜の獲物を照らすあかりが大松の根であつた。今から七十年ばかり前の話である。そう聞けば私も子供の頃、お堂の横に坐るような大きな木の切株のあつたのを見たような気がする。

何年か前国税庁が地蔵様の敷地処分に来たことがある。隣地は神仏を祀つた土地として之に応じなかつたが、若しそうならなければこの地蔵様も薬師堂の境内にでも移されて自然と亡びの世界にはいつて行つただろう。昔天籟寺が農村であつた時は、豊前坊、貴船は牛馬の護神として年一回のまつり

を持ち大切にされていたが、生活形態の変わった今日ではその名さえ知らぬ者が殆んどである。牛馬の神が今日生きようとすれば、その本来の御利益をすりかえて家内安全とか交通安全とかに看板を書き替へる他ないだろう。「六地藏」が今日特に子供のいる家庭に生きているのは、子供の病気を癒すという御利益にあると思われる。この意味から火除地蔵は密集の中に生活する者の、火事という現実の恐怖からしっかりとその心を捉え

るだろう。然し何といつても神仏はこれを世話する者があつてのことである。昔は天籟寺の地蔵様として、中組、下方組が世話していたのであるが、終戦後は中組七軒となり今日では

二軒となりそれに近所の篤志者数名が世話している。御本人達も単に火除地蔵本来の御利益のみとは受け止めておらず、矢張りそれぞ

れの実生活面の保護、救いの地蔵として信仰しているようである。この地蔵さまは戸畑四国第二十三番の礼所で毎月十四日、又春秋の大参りと言われる帆柱四国第二十五番の霊場で年十四回廻路が訪れる。

昭和四十四年に私共は盆踊り保存会を結成し、はじめに地蔵盆の夜この境内で踊つた。土手は朽え落ち、踊り場は土が流れて段々になり、丸で山の中のへらで踊っているようであつた。「せめて踊りの足場作りを」とこの時境内の整地の必要を痛感した。これをすればこの陰鬱な一角が防犯上からも安全地帯となり、通つて見たい気持ちを起こさせる明るい環境となる事を確信して同志相計り、昭和四十六年十二月その目的を果たすことが出来た。

昔「馬の足」「茶袋」の下がった魍魎魍魎の棲家は爽やかな青空を仰ぐ静閑清潔な場となり、舗装された道も歩道も子守道に、母車を押す若い母親の子守道に、老人が杖を休めるのに手頃な参り所をも持つ散歩道に、又元氣な子供たちの通学路は勿論のこと、通勤道に買物道に四季を通じて利用されている。今はこの環境の変貌

で火除地蔵の名を知らぬ者はない。それにつけても「協力」の偉大さをしみる。思う昨今である。当時の善男善女六十七名、芳志総額八十六万二千五百円。そうした人々へのお礼に毎年十一月二十四日には天籟寺住職を招いて

手書した「火の用心」の紙片に火難除けの祈禱をしてもらい、即日之を配っている。又十二月十四日の戸畑四国廻路日には同行衆に上げる事を例としていたが、これも昨年で六回を数えた。お互いが火元に気をつけるきっかけになればと思つている。この事は謂わば新しく世に出た火除地蔵の行事の一つになりつつあるが、今一つ地蔵盆の行事を始めたい。

火除地蔵にこれだけの関心を持った最初は何といつても古くから伝わる盆踊りの復活である。今では境内も広くなり、二十四日の夜はこの境内に溢れる程踊り子が集まつて年毎にその盛大さを加えてゆく。この中で特に昼間の行事として少年部の踊りを奉納している。少年部が発足したのは昭和四十七年。保存会は年毎に老い込んでゆく。保存会は年毎に老い込んでゆく。この中で特に昼間の行事として少年部の踊りを奉納している。少年部が発足したのは昭和四十七年。保存会は年毎に老い込んでゆく。保存会は年毎に老い込んでゆく。

小町姫の命と硝子箱に書いて中には木像の高さ七〇種、絵の具を以て彩色された御神体が長い風雪の為め材は不明だが数か所が腐蝕して左は手首から落ちて居り、美人小町姫も真に哀れなお姿である。

青木さんは古い方を譲り受けたものでむしろ此の方が価値が有る様な気がする。前に太鼓の事を一寸書きました、

供も中学に入ると俄然背を向けてしまった。惜しい気持ちでいつぱいだがどうする事も出来ぬ。然し反面小学生を勧誘しては新しく指導している現在である。考えようでは

踊りは勿論、口説き、太鼓を全く大人の手を借りることなくやれる段階まで来た。昔の踊り子が着たという銀紙貼りの絆天を復活して元氣に踊つた。今回で三回。この地蔵さまと共にこの伝統芸能の存続を若いものに託したい願ひである。

珍文閑文

戸畑区塚本智

今から十年余も前の、初夏の風が静かに吹き渡る六月頃でしたか。

戸畑の五社の一つである中原八幡宮の境内に有る、孝子森惣市の碑と、雨乞石を今一度見たいと思

い、同神社の森をぶらりと歩いた。拝殿の横に在る社務所の前の坂道を降り掛けた時、社務所の縁側に胡座をかいて煙草を吹かして居る老人が居るので何気なく其所に腰を降し、雨乞石や、戸畑の郷土研究会の事等話した所、そうです

か、私は青木と申しまして神様を信じている者です。実は私の宅に変わった物が有りますよ、マアお上り」と言はれる俣に座敷に上ると、其所には床の間に御簾が掛けられ御幣を飾り数個の三方には果物や野菜等が供えられた御神前である。思わず二拍一礼して待つて居ると本棚から取り出して来られた物は古い封筒で、中には郵紙に

墨で書かれた次の様な文書が遺入つていた。

- 小町神社略歴
- 一、小町姫ハ朝臣小野篁ノ孫ニシテ小野義実ノ娘也
- 一、義実公ハ都ヨリ当村ニ落付キ給フテ当村ヲ小野村ト名付ケ七国大明神ヲ泉水ノ辺ニ建立シ給フ
- 一、小町姫ハ小野泉水ノ辺ニ生レ給ヒ勅許ヲ得テ義実公ト共ニ上京シ給フ、十六歳時小野村ニ立歸リ両親ノ塔ヲ村中ニ築キ給ヒ再ビ上京シ給フ
- 一、深草少将屋敷当村泉水ヨリ三合程ノ所ニ今尚残レリ
- 一、布ノ川見タノ手等名所ハ今尚泉水ノ附近ニアリ
- 一、後区民小町姫ノ徳ヲ慕ヒ小町神社ヲ七国大明神ト共ニ別社トシテ祭り居レリ
- 一、其後小町神社ハ縁結ビノ神並ニ子宝授ケノ神トシテ人々ノ信

心スルモノナリ

氏子総代 本武敬藏

高輝永良

原田真人

譲渡証

一、此度小野小町神社神像並ニ御神像改像ニ付カネテ御貴殿当小町神社御信心致シ居ラレ候故今迄ノ御神像ヲ貴殿ニ譲渡シ候故小町神社支社トシテ御祭神下サレ度候

昭和拾四年 五月一日

熊本県鹿本郡山東村大字小野

区 長 園井清秀

宮惣代 本武敬藏

高輝永良

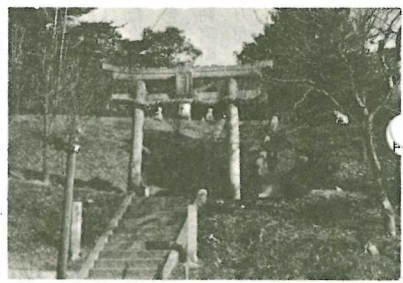
原田真人

議員 福原又斗

神習教師 青木重雄殿

證明書

別紙ノ通り鹿本郡山東村大字小野区長園井清秀外四名ヨリ譲受御神像ノ譲渡証記入ノ通り元小野小町神社ノ御神像ニ相違無之旨御証明被成下度此段奉願候也
昭和十四年五月二日
福岡県直方市尾崎区岩鼻
一、一八四番ノ一青木重雄殿
熊本県鹿本郡
山東村長 園木市松殿
右之通り相違ナキコトヲ証明ス
昭和十四年五月二日
山東村長 園井市松



中原八幡神社

書類に一通り目を通した私は、「其れでは床の間に祭つてあるのは此の小町神社ですか」と聞いたら、イーエ床の間は宇宙体霊教を祭つてありまして小町神社は其の横に祭つてあります」と左の方の硝子箱を示された。其の小町神社の前には、それは又直径一米以上もあろうかと思われる古い大きな太鼓が置いて有る。多分宇宙体霊教の奏楽の太鼓だろうと思つて別に尋ねもせず帰つた。

さて筆をとつてみると思ひだせないこともあり、もう一度青木様宅を訪れて、昔の思い出を新たにし度いと思ひ暖冬で温い昨年十二月中旬再度の訪問と成りました。然し青木さんは去る四十九年十一月八十二才の高齢で亡くなられた事を未亡人のミヨカさんから聞いて驚いた。こんな事なら重雄さんが健在の時にもっと詳しく聞いて置けば良かった、と尽々後悔した。

青木さんは古い方を譲り受けたものでむしろ此の方が価値が有る様な気がする。前に太鼓の事を一寸書きました、

が此の太鼓はミヨカさんの話では、「元熊本城に有つた物で重雄さんのおじさんのおじさん(伯父か叔父か)?に当る方が何年頃か年代も不明ですが(或は明治十年西南戦争の時?)熊本城に大変功勞があつたと言つたので、其の恩賞に此の太鼓を賜はつた」とのことである。金具の吊環や座金、皮止めの鉄の鋪方、胴の古い色合いから見て百年以上は経ている様な代物で胴の直径一米三三厘巾六一厘、疵も無く叩けば重圧な音で鳴り響くのを聞くと、或は熊本城の櫓太鼓であつたかと思われれるもので小町神社の前に据えてある。重雄さんは飯塚の小竹出身で二十年位前に戸畑に来られたもので若い頃から各地の霊場や修験所に行つては修業をしていた。三十才位の頃宝方山にて修業中激しい雨に逢い運良く洞窟を見付け、此所に避難して居た時五十才を過ぎた

修験者らしい人がすぶ濡れに成つて、「雨宿させて下さい」と言い乍ら洞窟に飛込んで来た。

同業者のよしみもあつて共に意気投合、四方山の話を持合せの焼米や炒豆等を分け合つて食べ居る間に漸く雨も止んだ。サア出掛けよう、と二人が立上り別れの挨拶を交した時其の修験者は背の荷物の中から銅製の筒を取り出して「私は此の山で三年の修業を終り今から下山する者で、私には不要ですから貴殿に揚げます。中に巻物と玉が修めてあります。玉は昔神功皇后様新羅征伐の折お腹に仲哀天皇のお子様を宿されて居たが戦争が終る迄産れぬ様に出産封じの玉として皇后の下腹部に修めて出陣された玉です」と言つて渡された銅筒は長さ三〇〇〇四六五九厘の物で有つた。青木さんは余り貴重な物を戴いたので一寸当惑したが厚く感謝して受取つたが、修験者は名も告げずに立去つて行つた。

此の玉のお陰で新羅征伐も勝利の裡に終り筑前香椎の仲哀天皇の御霊に戦勝報告の後、粕屋郡宇美の郷まで来られた時、俄かに御出産の兆候があつて皇子を御出産、此の皇子が後の第十五代応神天皇で御誕生の地が、今の宇美八幡宮と言われている。

玉は三・五種×三・二種で少し楕円形の滑らかな灰白色、元は錦の袂

刊行物案内
「片すみの椅子」
九州の文学と人物と自然、
歴史と民俗を語る随筆集。A
5・三二頁、頒価千六百円
著者 劉 寒吉
※ご希望の方は、最寄りの書店または著者まで。
本会刊行の「小倉城」(頒価千五百円)、「北九州市の文化財」(頒価八百円)は、いずれも残部あります。ご希望の方は事務局まで。

門司氏一門 ついに骨肉相喰む悲劇の事

門司区 小野田 幸雄

規矩城及び城野、黒原の戦い
(一三三二年(正平十七、貞治元)
筑前長者原(粕屋郡粕屋町)の合戦で斯波、少弐、大友、宗像、門司、松浦等武家方連合軍に大勝した宮方菊池氏は、その後伊川系の門司若狭守親頼が征西宮の令旨を奉じた報告を受け、やがて豊前に進軍して規矩の城に入った。そして、武光と親頼は関門海峡突破による宮の東上実現を誓約したのである。やがて、門司氏一門同族による骨肉相喰む悲劇の戦端はひらかれた。

まず、武家方の片野系門司左近大夫親資入道と少弐勢の連合軍は、八月二十八日から作戦を開始して、宮方門司親頼勢と菊池勢が拠る、規矩の城に先制攻撃をしかけてきた。この合戦のとき、門司城にたて籠っていた武家方の吉志系門司左近將監親尚勢も応援にかけつけたが及ばず、九月十日には城野合戦(北九州市小倉南区城野)十六日には、黒原合戦(小倉北区黒原)と転戦し、武家方門司・少弐の連合軍は敗走した。北豊における武家方勢力を掃討したと判断した武光は、この地は門司親頼に、預け

を得た武家方門司左近將監親尚は、一三三三年(正平十八、貞治二)七月に宮方門司氏に奪取されていた門司城固めて大内勢を迎え入れようとしていた。大内氏を入れることによつて、この門司城を北豊における武家方勢力回復の拠点にしようとしたのである。

この事態を知つた宮方門司若狭守親頼は、大内氏を九州に入れてはならないと、規矩の城に拠つてある菊池勢に連絡をとり連合軍を組織して同月二十一日門司城を攻撃した。しかし親尚勢の猛反撃にあつて散々合戦したが及ばず及ばず被害をこうむつて敗退した。やむなく親頼は猿喰城(門司区猿喰)に菊池勢は規矩の城にそれぞれ引籠つた。これまでしばしばでてきた規矩の城はどこなのか、はつきりしないが、おそらく丸城北方城(小倉南区若園)のことではなからうか。

こうした情勢のなかで宮方門司若狭守親頼は再度武家方門司氏の本城である門司城を奪取せんとし、宮方門司氏一族を猿喰城に召集して、門司城攻撃の軍議をかさねた。宮方門司氏七ヶ城のうち、既に三角山城(門司区清滝)と金山城(門司区黒川)は武家方門司氏に占領されており、宮方門司氏にとつて残された五城を作戦の中でどう生かしていくかが当面の課題であつた。

そこで、猿喰城(城である柳城(門司区大里)には柳系門司大和守親通を据え置き、辻畑城(門司区大横西)には大横系門司親章入道・親清父子を、丸山城(門司区大横)には親清の舎弟門司親秀を、伊川陣屋に伊川系門司親少輔親澄を、足立城(小倉北区黒原)には大横系門司親信入道を配置して、それぞれ一族郎党等とたて籠らせた。しかも、宮方本城の猿喰城と柳城には残余の総兵力を集集し、菊池勢の出陣を待つて武家方本城の門司城を南から包圍し攻め上げる態勢をととのえたのであつた。門司城に拠る吉志系門司左近將監親尚は、この有様を見て驚き、もし門司城が陥落したならば北豊における武家方勢力は一挙に壊滅されてしまふだろうと判断し、急遽九州探題斯波氏経に急使を送つて、大内氏の援軍派兵を要請したのであつた。九州探題と大内氏との提携の約は既に成立していたし、また大内氏にとつて九州進出はかねてよりの野望であつただけに、武家方門司氏の後援要請は「渡りに舟」でもあつた。このことがやがて、門司氏一門にとつて自ら大内氏の勢力下に沈下させて、いく遠因ともなつていくのである。

柳城の攻防
(一三三三年(正平十八、貞治二)
十一月大内弘世は、武家方門司氏後援のため、小野、佐々木氏等

心のふるさとをしのんで
群馬県前橋市 新井 清二郎

香椎には少弐氏一族がいてそれぞれ武家方門司氏を支援していた。一方、宮方に帰順した大内弘世が、宮方門司氏や菊池氏を関門海峡を渡つて北から助勢したので、北九州における武家方勢力は大きな脅威を受けていた。このころの九州での北朝方のあらましの形勢は、豊後大友氏は旧の如くふるわず、宮方から寝返つた阿蘇氏、肥前の松浦氏も勢力弱く、薩摩の島津氏は事情によつて兵を出されず、このような九州武家方の頹勢を挽回せんがために九州探題斯波氏経は、小弐武家方門司氏、麻生氏等の諸將としばしば謀議をかさねた結果、窮余の一策として中国の大内弘世を武家方に引き入れることに相談がまとまりその手配は、武家方門司氏等によつて進められた。大内氏はこれまで時に武家方、時に宮方と転身を繰返してきていた。それは、大内氏にとつては厚東氏の追放と、九州進出の野望の実現のための手段であつたわけである。九州に自家勢力の拡大ができるものであればどんな、背信行為をも実行してきた大内弘世は、今回も周防、長門二国の守護にするという武家方の勧誘には、簡単に応じ提携するに至つたのであつた。